

なりゆきからの奮闘記

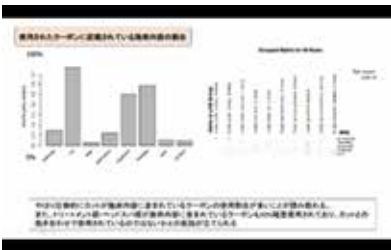
久保田貴文ゼミ 経営情報学部3年 稲庭 克洋

私が久保田ゼミに入ったきっかけは、ゼミの活動内容の一つである情報の解析・視覚化という部分と趣味の野球観戦を結び合わせて「野球に関するデータの視覚化をやってみよう」と考えたからです。

結局実際の活動の中では野球に関するデータの視覚化は行っていないのですが、ゼミ活動の時間では統計の基礎の勉強や、久保田ゼミとして参加している経営科学系研究部会連合協議会が主催のデータ解析コンペティショングループの一員としてヘアサロンチェーン店のID-POSデータの分析の作業に取り組んでいます。今年はゼミ内から2チームがコンペティションにエントリーしており、その中の一つとなる私が参加しているグループでは、アソシエーション分析をメインの手法に用いて、クーポンの割引対象となっている施術の種類ごとの分類や、種類ごとの関連性について分析・視覚化を行いました。最初にコンペティション事務局から配布されたデータを見た際、データ提供元の業種に関する知識不足を痛感したことや、他校との合同発表会での他のグループの発表の出来栄に対し、このままでは非常にまずいのではないかと危惧感を覚えた事など決して良い思い出だけではないですが、資料制作のために行ったゼミ合宿等も含めて、超・実践的なグループワークの一つとして取り組むことが出来たと思っています。



「そもそもアソシエーション分析って何だっけ?」という、今思えば非常に情けない所からのスタートでしたが、作業を進める過程で物事を調べる事で、それらの知識が身についていくなど作業を通じて得られるものが非常に多かったと思っています。それと同時に、何事にもとにかくチャレンジしてみることが大事という事を改めて感じる事が出来た有意義なゼミ活動でした。



データ解析コンペの中間発表のスライド

統計データをグラフでまとめてみて

久保田貴文ゼミ 経営情報学部2年 工藤 春哉

僕は久保田ゼミでデータ統計について学んでいます。ゼミに入ったきっかけは漠然と統計やデータ処理について学んでみたいという思いでした。いろいろなゼミの説明会に行く中で久保田先生のゼミが一番自分に合うのではと思い選びました。実際にゼミに入ってから活動は統計グラフコンクール(パソコン統計の部)に参加し、その活動を通じて統計について学びました。グラフコンクールで僕は学バスの利用状況を調べるためにマクロミル社が提供している「questant」というサイトを利用し、多摩大生を対象にアンケートを実施しました。その結果、曜日によって利用人数の偏りがあることが判明したので、その結果をもとに改善案を含めてポスターにまとめあげました。



アンケート調査の結果のグラフ

グラフコンクールを経験し膨大な量のデータを使うことの難しさ、視覚的に物事をわかりやすく伝えるための色使いや図の表示形式、様々な観点から問題を解決していく術を学びました。今後も様々な手段を身に付けていき自らをスキルアップさせていきたいです。

【2017年度プレゼミ読書感想文コンクール金賞受賞】辻村深月著 『ツナグ』を読んで

経営情報学部1年 鈴木 佳奈

私がこの本を読もうと思った理由は、映画を見た時、原作を読みたくなったからだ。私は、話題になっている小説は、最初に映画を見てから原作を読むことが多い。映画とは違う場面があり違った面白みもあるからだ。先に映画を見ていることから、場面も思いだしやすく、内容も理解しやすい。

ツナグとは、亡くなった人と一度だけ再会させられる「使者」である。一夜だけ再会する使者と生者の会話。再会し、何を思うのか。再会したことで分かったこと、逆に知りたくなかった事実もある。ツナグの掟として、生きている間に一回、死後に一回だけしか会うことはできない。生者が会いたい人をツナグに依頼し、OKの返事がもらえたら会うことができる。生者と死者が会うことができるのは一晩だけ。お金はもらわずボランティアで行うことが鉄則だ。そして依頼人から会った感想をもらうことも重要である。

この本では、ツナグが受けた依頼で4つのエピソードについて書かれている。アイドルと再会する会社員、母親と再会する長男、高校生の親友の再会、交際相手と再会する会社員についてである。さまざまな依頼者がいて、依頼者が抱える悩み、再会しても必ず喜ばれるというわけではない。そんな、死者の葛藤も書かれている。印象に残ったのは、祖母から使者の仕事を継ぐ見習いを始めた高校生の歩美の本人視点での日常生活についてである。

仮に、現実にはツナグが存在したら、私は誰と再会するのだろうか。どんな会話をするのだろうか。考えてみて、わたしは祖父と会いたい。祖父は私が小学校低学年の頃に亡くなった。まだ幼かったことから思い出は少ないが、両親からとても面倒を見てもらっていたと聞いた。たくさんのおもちゃも買ってもらったそうだ。

今でも大切に残っているものがある。それは、祖父からもらったぬいぐるみだ。誕生日の時にもらった大切なものだ。私が幼い時に亡くなってしまったため、私からプレゼントを渡すことができなかった。このような後悔があるから、祖父にプレゼントを渡し、大人になった姿を見せてあげたい。しかし、祖父にとっては再会することができるのは一回だけという掟があるために、小説の中の依頼者が悩んでしまうことがよく分かった。

再会する人は、謝りたいこと、聞きたいことを聞けず別れてしまって、後悔していた。その理由で私は、この小説から、全く後悔しない人生は無理かもしれないが、後悔することが少ない人生をおくれたら最高な人生だと感じた。

〈木村知義 産業社会特講〉

「デジタル時代のメディア実践」の現場から

魅力的な情報発信をめざして！
～必要が学びの花を開かせた—私のメディア実践 2017～

経営情報学部 1年 田島 宏基

多摩学の授業でプレゼンテーションすることになった。多摩地域の市町村から一カ所を選び紹介するというものだ。八王子に住む私だが多摩地域に特に思い入れもなく、ただ何となく、過ごしてきた。親は東京 23 区出身で結婚して八王子に引っ越して来たらしい。私にとっては故郷になるわけだが、特に特徴もなく、冬はやたら寒く、夏はひたすら暑い。そして山が多い地域だ！と思っていた。そんな「田舎」が嫌で高校は都心の学校に通った。でも、朝は人一倍早く起きて通勤ラッシュに耐え、夜もラッシュに揉みくちゃにされて帰ってくる。体力的にもこたえるものだった。そんなこともあって多摩大学に進学することに背を押されたといえるかもしれない。

さて、多摩学のプレゼンテーション。どこを取り上げようか。考えた末、23 区寄りの「小金井」を調べることにした。やるからには本気でやろう！プレゼンを聞いた人全員が「小金井に行きたい」と思うプレゼンテーションにしようと思った。そこで「デジタル時代のメディア実践」で学んだ動画の企画・制作を活用して、小金井の「PR 動画」を制作することにした。

テーマは「小金井で生活する人々」だ！

公園がたくさんあり、都心へのアクセスも良い小金井はとても住みやすい街だ。それが最大の魅力。その魅力を引き出すには…それをどう描けば伝わるだろうか。必死に考えた。答えは歌にあった。「恋ダンス」を踊ることだ。「恋ダンス」は「逃げるのは恥だが役に立つ」で話題を呼び社会現象にもなった。これを小金井の各所で踊り、撮影することで、興味を持って見てもらえる動画を作ろうと思った。

ビデオカメラを持ち、いざ！小金井へ。「暮らしの中で」「人々が営む」そんなコンセプトを意識しながら撮った。いろんな人々の暮らしがあることを表現するために衣装を替えて、できるだけ多くの場所で踊った。現場に行ったことで多くの声も聴いた。

そしてプレゼン本番！教室の全員が僕のプレゼンに耳を傾けてくれていたことが分かった。そして、感動を届けられたこと、何より小金井という街を伝えられたことが嬉しかった。「いや～、スゴイ！」「良かったよ！」という声が増えてきた。人に伝わるってこんな素晴らしいことなんだと感激した。そして、多摩が、少し好きになった。

今回のプレゼンは「デジタル時代のメディア実践」の学びがあってこそだと言える。吸収した知識とスキルを私なりにフル活用した。動画や新しい技術を取り入れることで立体的なプレゼンテーションを上げることができると実感した。

教室ではいつも先生から「なぜ、こんなことを学ぶのだろうか？君たちが社会に出た時、どう関わりがあるのだろうか？」と問いかけられた。そして、これからの時代は「誰もが情報発信する必要に迫られることが日常になる。だから、どうすれば見る人、聞く人の関心を惹きつけられるのか、魅力あるそして伝わる情報発信力が大事になる」と言われ続けた。

つまり！教室で学ぶだけでは終わらないのだ。大事なことは、使うこと、活用すること、実践することなんだ！

多摩学のプレゼンを通して私が身体で学び取ったのは、このことだった。これからも、もっともっと魅力的な情報発信力の獲得と実践をめざして！私の「メディア実践」、2017 年度締めくくりの報告である。



「恋ダンス」を自演して撮影も—東小金井駅前



発表は新感覚の最先端プレゼンツールで

人が心豊かに暮らせる社会のために
～制作から見てきた「メディア実践」の意味～

経営情報学部 3年 村山 竜晟

私は、大学に入る前からイラストや陶芸、コラージュといったさまざまなデザインに触れ、学んできた。作品を作るのはもちろん、アイデアを生み出すのにも学ぶのにも、情報とともに人との関係・関わりはとても大事なことだった。そんななか、私はある一人のデザイナーと出会い、その人の過去の体験、「虐待」について聞いた。メディアでも虐待の言葉をよく耳にしていたため「虐待」について少し調べてみた。そして、驚いた。まるでドラマのような事件や私が親の立場に立ったらやってしまいそうな事例もあった。こうしたことを知らないのは私だけではないだろう、特に、今から親の立場に立つことになる大学生は知る必要があると思い、産業社会特講の課題で、この問題についてわかりやすく知ってもらおうと動画の制作を思い立った。

企画を詰めていくうちに、このテーマはかなりの難題だと改めて気づかされた。木村先生からは「君の企画は大事なテーマだが、重い問題だね。焦らずじっくり取り組むことだね」と言われた。多くの事例について情報を集めた。虐待が起きた理由はなんだろうか、その事例がどうして虐待と判断されたのかな…など、とにかく、次から次と疑問が出てきた。たとえば、「これは、うちの教育のやり方だ」と言われてしまえばそれまで、というようなこともいっぱいあった。何が「虐待」で、何が「しつけ」で、何が「教育」なのか…。考えていくともう大変だった。本当に重くて深い問題だった。実際、制作を一度見直したほうがいいかと思ったほどだった。

私は試行錯誤しながら、まだ「仮」の段階だが作品にまとめてみた。その経験を通してたどり着いたことは、まず、どんなことでも人に寄り添うことの大切さだった。虐待防止のための法律ができたのはつい数年前のことだ。それを知っている人は何人いるだろうか。急に示された「規則」にすぐに対応できるか、たぶんできないだろうと思う。虐待は確かにいけないことだ。だが規則によって縛られるだけでは、生きづらくなりそれがストレスになる。ここから逆に虐待が加速する可能性もある。

これは、虐待問題だけではなく、我々の暮らしのさまざまなことにも当てはまる。スポーツや趣味だって同じだ。人の考えはさまざま、そのなかで生きづらくしないためにも、とにかく規則で規制し、縛る前に、まず何をすればいいのかを考える。そんな、人に寄り添う発想に立った「対策」が必要なだろうと思う。これは、私がこの企画を進めていくなかで見えてきたことだ。

もう一つ。現在子どもを持つ親に、そしてこれから親になる私たちに必要なことは何か。月並みに聞こえるかもしれないが、子育て、教育には「純粋な愛」が必要だということだ。「愛の鞭」ではなく「純粋な愛」！これは、この企画の取材をすすめていくなかで、実際に虐待を受けた体験を持つ「友人たち」が必ず「動画に入れてほしい」と言った言葉だ。

「メディア実践」とは、人間と向き合って、人間について考えること。

これが「デジタル時代のメディア実践」の学びを通して、私がいまいちばん大切にしなければと思っていることだ。「メディア実践」とは、そんな、みんなが心豊かに暮らせる社会のための大事な営みなのだと思う。私の「メディア実践」のたどり着いた場所である。



企画のプレゼンから疑問との格闘が始まった



真剣！想像力が問われる毎日だった

自分自身を試すことが出来る場所：多摩大学

グローバルスタディーズ学部 4年 原 周平

私が考える、多摩大学グローバルスタディーズ学部（SGS）とは「自分自身を試す場所」である。それはSGSが新しい学部という事もあり、学校生活の中でも常に新しい試みが施され、私達は前例のない事柄に向き合わなければいけない。学生の中には、そういった変化について行けず途中で大学を辞める者や単位を落としてしまい留年を余儀なくされてしまう者、学校のシステムを理解していない教職員もいた。その環境下、私が挑戦したものは2つある。1つは、自分だけの学校生活における環境を作ること。もう1つは公務員になることであった。

私は、入学当初は大学生活に充実感を見出せていなかった。友人はいたし、自分の時間も取れていたが、何か足りないという感覚があり、学費に見合った生活を送れていないと不満に思っていた。しかし、特に何か行動を起こすわけでもなく、何となく大学生活を送っていたが大学2年の秋学期に私の転機が訪れた。2年の秋学期が始まって間もない頃、私は人間性も能力も優れた友人と親しくなった。彼らとの出会いがきっかけで新しい事に取り組む為のアイデアが浮かび、私はその友人達と共に地域貢献サークルを結成した。私のサークルは所属メンバー一人一人のスキルアップを目標に掲げ、学生のみで学校外の組織に働きかけて活動して来た。その活動内容は、藤沢市観光協会さんが持つ外国人向け公式FACEBOOKの運営や、湘南モノレールという会社の社長が大学を訪れた時は個人的にアプローチをかけ、積極的に地域での活動チャンスを増やす事であった。そのうち、湘南モノレールさんから食事に呼んで頂くようになり、そこで様々な話を聞いて多くの事を学んだ。また地域イベントでは湘南モノレールさんと共に参加して地域貢献をすると共に社会勉強をすることも出来た。学園祭でも湘南モノレールさんと協力してブースを作り、そこでも社会人としての姿勢を学んだ。このように、友人達とサークル活動を通じて社会勉強をすると同時に各々の得意分野や社会スキルを鍛えることが出来たことが何よりもの財産となった。

そして、私が挑戦した事の2つ目は公務員になることであった。私は、入学当初から自衛官または警察官になることを目標に掲げていたが、当然のことながら、それは簡単なことではなかった。普通、公務員を目指す場合は早いうちから予備校などに通い試験に備えることが必要となってくる為、民間企業を目指す事よりも困難でハードルが高い。SGSには公務員対策講座はなく過去に自衛官や警察官になった者は一人もいない。それに加え、私は下に兄弟がいるため授業料の高い予備校に通うことは出来なかったが、自分の将来に関して誰の力も借りるべきではないと考え、独

学で公務員試験に臨んだ。当然、公務員を目指すより、民間企業を狙った方が比較的簡単に早く、就職先を決めることが出来たであろうが自分で決めた目標に関して妥協は許せず、民間企業には魅力を感じることが出来なかった為、楽な方へ逃げるより敢えて困難の多い道を選ぶことにした。

夏休みに入ると、目標を警察官に確定し、勉強を始めた。そこにも私のこだわりがあり、警視庁のみを狙い、それ以外の県警は視野に入れていなかった。そして、それに向け本格的に勉強を始めたが、思っていた以上に厄介であった。なぜなら、過去問題をどんなに解いてもなかなか試験感覚を掴むことが出来ず、不安は増すばかりで自分がやっていることが無駄に感じてしまい、モチベーションが下がるからである。友人達も次々と内定を取り、就職活動を終わらせていくのを見てみると、焦りが出てくる。夏休みに大学で警察官の試験勉強をしている私の姿を見て教職員も「もっと早く準備すべきだった」「予備校に行かなければ、ほぼ不可能」「早いうちに一般企業にシフトした方がいい」などと言っていた。もちろん、彼らは私の事を考えた上で私の負担を取り除く為に発してくれた言葉であったが、その時の私には何の励みにもならなかった。しかし、その不安が次第に闘志に変わって行き、自分だけの力で勝利を勝ち取るにより誰よりも輝かしい成果を出してみせると強く再決意させられた。その気持ちと共に勉強して試験に臨んだ結果、筆記試験は無事通過。論文や面接も全て自力の対策でやり抜き、警視庁の警察官採用試験に合格する事が出来た。

私がこれまでの生活を経て学んだことは、自分を信じられた者だけが成果を挙げられるという事と状況に応じて瞬時に切り替える事の大切さである。その自信は努力の積み重ねによって形成されるものであって何の根拠もない自信はただの勘違いであり、かえって失敗を引き寄せる要因となる。日常生活で直面する様々な問題を徹底して解決していくことが本物の自信に繋がる。そして、私は最終的に自身の目標を達成する事が出来たが、一つやり遂げれば、また新たに課題が課される。つまり、私が自力で目標を達成したという事も過ぎてしまえば単なる足跡でしかなく、取るに足らない過去でしかない。重要なのは、これから向かっていく先であり、そこには、これまでよりも難解な問題が待ち受けているという事である。それに怖気づかず、打ち負かしていく事で自身を成長させ、私を支えてくれた家族や友人達、お世話になった一部の教職員の方々に恥じぬよう強く生きて行くことで恩返ししていきたい。



私の友人達



友人とのBBQ



平成 29 年度経営情報学部学生会執行部部長 兼 多摩祭実行委員会委員長 3 年 玉木 真悟

平成 29 年度学生会の部長を務めさせていただき、忙しくもやりがいのある仕事に恵まれて、多くの事に取り組む事が出来ました。学生会会則の変更から始まり、留学生の歓迎会と交流会、BBQ パーティー、ハロウィン、クリスマスパーティー、毎月の学生総会など学生会のメンバーと大学の活性化に貢献できるよう努力してきました。多摩大学多摩祭実行委員会の委員長も兼任させていただいた中で、このような事に携わる事が出来て幸せだったと実感しています。

大学教職員の皆様、保護者の皆様、そして学生の皆様、これからも学生会をよろしく願いたします。

1 年間本当にありがとうございました。



ガーデニングお手入れ中



バーベキュー



バーベキュー内：交換留学生送別会



多摩祭ハッピー



交換留学生歓迎会



交換留学生送別会



多摩祭

平成 30 年度経営情報学部学生会執行部部長 1 年 田島 凜太郎

この度、平成 30 年度経営情報学部学生会執行部部長を拝命しました田島凜太郎です。

私は学生会執行部長として、学生の意見をより多く聞き、この多摩大学を学生にとってより居心地の良い空間にしていきたいと思っています。

私が実現したいことは、まずサークルの活性化です。新入生が既存のサークルに入りやすくすること、そして新しいサークルを作りやすい環境にしていきたいです。また、グローバルスタディーズ学部との有意義な交流も積極的に深めたいと思っています。最後に、多摩大学で多くのイベントを開催することで在学学生を含め、高校生が興味を持つような楽しい大学にすることに努めていきたいと思っています。宜しく願いたします。

経営情報学部学生会所属学生団体(サークル)紹介

https://www.tama.ac.jp/student/smis/smis_circle.html

ばどわいざー

ばどわいざーは多摩大学唯一のバドミントンサークルです。ポーリング大会や夏合宿。冬にはスノー合宿を行うなどイベント盛り沢山です。ラケットを持っていない未経験者もラケットの貸出を行っているので是非来てみてください。

皆で楽しくバドミントンをやりましょう!

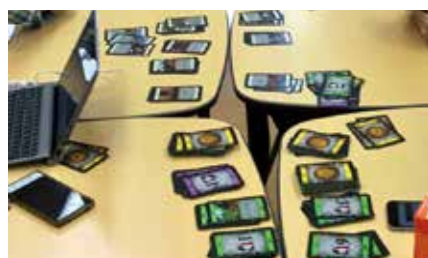


F.E.I.T アナログゲームサークル

テーブルゲームやボードゲーム、TRPG といった思考遊戯を通して、「考える力」の活性化、柔軟な思考能力を身につけることを目的として活動しています。

難しいことを考えず、まずはルールを覚えて色々遊んでみましょう。

気軽に見学等いらしてください。



日本伝統文化研究会

日本伝統文化を心から楽しむサークルです。

現在は、31 名のメンバーで活動しており、茶道や影絵・将棋等様々な日本文化を体験致します。

外部の団体とも共に活動を行ったりと、幅広く活動をしています。

